The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	子どもにまつわるコミュニケーションデザイン研究会：「子カフェ」の実践
Author(s)	久保田, テツ; 八木, 絵香; 蓮, 行 他
Citation	Communication-Design. 2012, 6, p. 97-101
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9964
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

子どもにまつわるコミュニケーションデザイン研究会
―「子カフェ」の実践

久保田テツ（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）
八木絵香（大阪大学CSCD）
蓮 行（大阪大学CSCD）
春日 匠（大阪大学CSCD）

Workshop for the Communication-Design about the social situation around Children - Practice of "KO-CAFE" (Child-Cafe)

Tetsu Kubota（Center for the Study of Communication-Dsign, Osaka University）

「子どもにまつわるコミュニケーションデザイン研究会」（通称「子カフェ」）は、親、そしてそれ以外の人々が、“子ども”という存在を通じて、教育や医療、倫理や諸制度など、様々な社会的な課題について共に考えるための場である。

キーワード
子ども、カフェ
children, workshop

1. 「子どもにまつわるコミュニケーションデザイン研究会」の主旨

「子どもにまつわるコミュニケーションデザイン研究会」は、“子ども”という存在に関わる社会の様々な課題について、参加者と対話を重ねる場である。この研究会は、中心メンバー4人の内3人が未就学児を育てる親でもあり、育児についての井戸端会議がその発端となっている。

それは次のような雑談から始まった。「子どもが誕生することによって親になるというよりは、“親”という社会的な役割をいきなり与えられてしまう気がするんだよね。それにどうも居心地の悪さを感じてしまうんだけど。」しかし話を進めるうちに、その居心地の悪さの意味がぼんやりと明らかになっていった。つまり「親」という肩書きはあっても、そこには意志の揺らぎ、迷いが常につきまとうこと。育児の場において、経験者であってもなおも知らないこと、わからないことだらけ、いや、経験を積めば積むほどわからないことだけになってしまうということだ。いきなり降ってわいた親という役割を背負い、医療や教育、倫理や諸制度まで、「子どものために」様々な選択を迫られることへの戸惑い。しかも、これら子どもをめぐる意志決定には、当然のことながら多くの場合、唯一無二の正解はない。だからこそ親は「公園デビュー」という名のもとに近隣の親との情報交換を求め、あるいはイ

ンターネットの質問サイトで広く意見を募り、手探りで解を見出そうとする。出産、予防接種、病児保育などといった医療的局面から、保育園、幼稚園、絵本や知育玩具といった教育的局面。公共の場における子どもの振る舞いや、公然授乳といった倫理的局面、各種手当などの公的助成金の在り方といった諸制度の局面に至るまで、親は常に悩む。自分の子どもにとって、どの選択が最も相応しいのか、という選択を迫られ続ける。また、そのような状況を煽るかのように、マスメディアでは子どもの扱いにページと時間を割き、ベビーファッションから児童虐待に至るまであらゆる特集が組まれる。少子化が進む近年において、子への過剰な期待や思い入れが増しているせいだろうか、市場には子どもをめぐる多くの商品や企画が溢れるようになった。そうして、親はますます多様化する選択肢を目の前にして困惑する。何故なら、その選択は「子ども」という未知の生き物に対する、親としての自らの価値観を問われるからだ。では、その問いを発する主体は何か。それは親族や近隣だけではなく、（その是非はともかくとして）私たちの社会そのものなのである。

素朴で些細な雑談から始まった「子どもにまつわるコミュニケーションデザイン研究会」は、「子カフェ」と呼ばれながら、子どもをめぐる様々な意志決定の場とそこに生じる迷いや戸惑い、あるいは確信を、参加する人々との対話を通じて各々が確認し、考える場として動き出した。参加資格は無い。子どもを持つ親はもちろん、子どもを持たない大学生や高校生、中学生でもよい。それは、多様な人々と共に、子どもという存在から生じる問題や課題について考えることが、子どもの持つ「社会的な存在」としての側面にふさわしいと考えるからだ。

2. これまでの「子カフェ」の実践

2010年6月、大阪大学豊中キャンパス内にあるCSCDのサテライトスペース「オレンジショップ」において、「子どもにまつわるコミュニケーションデザイン研究会」の公開型キックオフミーティングを開催した。またこの時、公開型のミーティングを「子カフェ」と称することとした。主に口コミによる広報を行った結果、集まった参加者は大人13名、子ども5名。事前に、託児業者に委託し、会場の一角を託児スペースとして確保することを明言していたこともあり、参加者の多くは、幼い子どもを連れてやってきた（図1、2）。初回となる子カフェは、今後に掲げるべきテーマを紡ぎ出すための意見交換を目的としており、参加者自身の子どもにまつわる疑問や課題について直接インタビューする場であった。そして、会場からは主だって次のような声があがった。「予防接種って本当に必要なの？」「子ども手当って誰のものなの？」「親のエゴって何だろう？」「子どもに“死”を伝えるにはどうしたらいいの？」「病児保育の在り方が気になる」「人前で授乳することってダメなの？」

図1

図2

「子どもの学びとは何か？」「子どもに関する話題を選ぶ、素直になんでも口に出せない社会ってどうなのかな」「雑誌でよく見かける子育て特集に、主に母親しか出てこないのはなぜ？」等々。そしてそれらの声はさまざまな対話へとつながっていった。幼児期の予防接種は極低確率ではあるものの死亡リスクを伴う。もちろん、予防接種を受けない場合の死亡リスクも存在する。親は、この双方のリスクをどのように比較し、受け入れるべきか、といった話題。また、昔話の絵本に出てくる登場人（動）物の死を理解できない子どもに対して、どのようにその概念を伝えればよいのか悩む。現実場面で人の死に接する機会がほとんどなくなっているからこそ、その手がかりがつかみにくいといった話題。いずれも正解がはっきりと見えない問題であり、まさに医療や科学、制度、哲学や倫理、メディアといった諸領域を横断する問いでもある。この日のキックオフミーティングは2時間かけて行われ、活発に意見が交わされる会となった。同時に、大学という場所で親と学生が共に語り、その傍らに子どもたちが声を上げて駆け回るという、ある種奇異で幸福な風景が生まれた瞬間でもあった。

2011年6月、2度目となる「子カフェ」を設けた。今回は、初回に実施した際に参加していた大阪大学の学生団体「Scienthrough（サイエンスルー）」のメンバーが主体となり、当研究会メンバーがそれをバックアップする形で開催された。場所は前回と同様にオレンジショップ。また、今回は「Scienthrough」のメンバーによって予め「あなたの隣の子連れ～公共の場での授乳ってアリ？」というテーマが設けられた（図3、4）。公然授乳は、授乳をする人、そしてそれを目の当たりにする人との関係性を問うテーマであり、日本のみならず世界的に議論される話題でもある。例えば、台湾では公衆の場における授乳をやめさせようとする人に罰金を科す法案が出され、またアメリカでは人前で授乳を行ったことで、セクシャルハラスメントの訴訟をおこされた実例がある。あるいは、同じくアメリカで、カフェでの授乳が原因で店を追い出された母親の呼びかけで抗議デモが起こり、オーストラリアでは「授乳OK」のステッカーを貼るレストランがある。日本でも各所で議論され、インター

図3

図4

ネット上では現在も熱い議論が交わされている。では、この場に集う私たちはどのように考えるのか。参加者は大人16名、子ども5名。前回の「子カフェ」と大きく異なる点は、子どもを持たない学部生や院生が多く参加（8名）していたことである。

公然授乳というテーマから始まった議論は、「する側」と「される側」の倫理意識に関する話題へと移行していった。授乳の際、衣類などである程度隠すにせよ、人前で肌を露わにすることへの抵抗の有無。また、その傍らにたまたま居合わせてしまった人間の心境。「乳児への食事である」という母親としての前提。一方で「目線の置き場に困る」という他者。公然授乳は時に、無関係な周囲の人々を当事者として巻き込む状況を生み出す。そして、図らずもする側とされる側の両者が、自らのセクシャリティを露呈してしまう瞬間となる。この構造を暴力的なものとして捉えるのか、あるいは社会的な風景として受け入れるのか、といった論点から対話が加速していった。その後、都市部と郊外における公然授乳への意識の差、授乳スペースをめぐるハード整備に関する議論が交わされ、終盤、授乳や出産といった女性特有の振る舞いについて話が及んだ。自然分娩のみが良しとされる風潮への疑問など、幅広い話題が繰り広げられ、社会における女性の立場、その役割についての対話が進行しつつ、カフェの終了時間を迎えた。それまで子育てにリアリティを感じていなかった学生からは「授乳がここまでの議論になるとは思わなかった」「自分を育ててくれた母親の苦労を実感した」「自身の倫理観を改めて問う場となった」「子どもなんて自分には関係ない存在だと考えていたが、そうではないことに気づかされた」などの声が上がった。

3. おわりに

「子どもにまつわるコミュニケーションデザイン研究会」は、研究会メンバーの産休があったことで一時休止していたが、その復帰にともなって2011年冬から再び活動を始めた。先にも挙げたように、この研究会では、医療や教育、倫理や諸制度といったあらゆる視点か

ら子どもをめぐるテーマを提示し、参加する人々と共に対話を広げていきたいと思う。子どもをめぐる有象無象を語り合いたいと考えている。

幸か不幸か、子どもをめぐる議論は尽きることはない。親は常に迷い悩み、親以外の人々は不意に当事者となる自分に戸惑いながら思考し、各々にとって最適な解を見出そうとする。だからこそ、互いに対話し視線を交換する場が必要なのだと思う。

そして、その対話は同時に、将来の社会を想見することに繋がっている。子どもを通して社会のあり方を考えることは、私たちの未来を考えることなのだ。子どもという存在は、未来そのものであるのだから。